

JA人づくり研究会通信

2011 12 | DECEMBER 第11号



女性ので地域に風を

これまでJA人づくり研究会では、「地域をおこす人材創造」「JAは地域貢献にどうかかわるか」「組合員参画型の事業と人材のイノベーション」などをテーマとして実践事例の紹介をしてきました。そうした中で、地域おこしに欠かせない「女性のパワーの活用とその方法」を常に意識してきました。女性を正組合員として迎え、その比率が40%を超えるJAが存在している中で、女性のパワーと能力をどう生かしていくかが問われています。

そこで、第11回の人づくり研究会では、これまでの研究会で発表いただいた女性の報告者にパネリストとして再び参加いただき、男性中心に行われてきたJAの運営や事業展開の限界を打ち破るにはどうすべきか、男女共同参画による地域に根ざした活動や事業をどう進めていくかなど、自らが実践してきた取り組みを交えながら議論を深めました。

CONTENTS

- 女性ので地域に風を 1
- 平成23年度
JA人づくり研究会総会報告 2
- 特集
第11回研究会 3
 - ・代表レポート
JA人づくり研究会代表
今村奈良臣氏
 - ・第11回研究会 プログラム
 - ・パネルディスカッションのポイント
(パネリスト紹介)
- JA人づくり研究会ホームページの
ご案内 12

平成23年度JA人づくり研究会総会報告

JA人づくり研究会は平成23年8月19日、東京・大手町のJAビルで、平成23年度総会を開催しました。平成22年度活動報告（案）、平成23年度活動計画（案）などについて確認しました。

平成22年度 活動報告

1. 研究会の開催

平成22年 7月 第8回JA人づくり研究会
平成22年度JA人づくり研究会総会
10月 第9回JA人づくり研究会
平成23年 2月 第10回JA人づくり研究会

2. ホームページを通じた情報発信

平成21年10月20日ホームページを開設し、研究会の活動報告を順次掲載した。

3. JA人づくり通信の発行

4. その他、本研究会の目的を達成するために必要な活動

平成23年1月に代表、副代表が広島県・世羅高原6次産業ネットワークの各団体を視察・調査した。

平成23年度 活動計画

1. 研究会の開催

会員からの要望および、JAにおける課題を考慮し、年3回程度の研究会を開催する。

2. ホームページを通じた情報発信

ホームページを開設し、研究会の活動報告を行う。また、会員間の情報交換・交流を行うため、「掲示板」を設置し、情報交換、課題解決のヒントを得たりできるようにする。（なお、投稿字数は2000字まで）。

3. JA人づくり研究会通信の発行

毎回の研究会の内容を要約した「JA人づくり研究会通信」を発行し、会員への情報発信を行う。

4. その他

本研究会の目的を達成するために必要な活動を行う。

（詳細は総会資料参照）



特集 第11回研究会

代表レポートおよび問題提起
女性の力をJAの活力の源泉に

JA人づくり研究会代表 今村奈良臣

私が以前から言っていることですが、「JAは女性正組合員と女性役員を大幅に増やし、JAの活力の源泉にしよう」ということを、あらためて今日、この席で強調したいと思います。女性正組合員比率の高いJAは、非常に活力がみなぎっています。これは私のこれまでの、いろいろな調査と経験を通して、そう思っています。女性役員が多いJAは、女性の新鮮な目線と企画力で、特に女性の高齢技能者の方々の活力を引き出し、地域農業再生へのエネルギーに燃えています。私は、高齢者と言いません。高齢技能者です。

女性が日本農業の半分余りを支えているにもかかわらず、正組合員比率はわずかに18%に過ぎず、

役員はわずかに738人、3%に過ぎません。JA全中も、一生懸命目標数字を掲げていますが、実態はこうです。第25回JA全国大会では、正組合員の比率を25%以上、総代10%以上、理事等の役員は、1JA当たり2名以上と言っていますが、たぶん、今のままでいけば、100年先も同じかもしれません。そういうことでいいのかということ、やはり言っておきたいと思えます。

それから、多様性の中から真に強靱な活力は育まれます。画一化の中からは、弱体性しか生まれてこない。どうもこの辺が、JAの弱みだと思うのです。多様性を真に生かすのは、ネットワークです。特に女性は、一人一人は力が弱い

ところもありますから、ネットワークを組みます。この素晴らしい活動を、第11回人づくり研究会のこれからのディスカッションで、大いに学んでいただきたいと思っています。

最後に、これは私の信念ですが、“Challenge! At your own risk”、全力を挙げて挑戦しなさい。それで、泣き言を言わないで、全責任を自分は背負いますよと、そういう精神で、何事にも実行していただきたいということです。

別の表現ですけれども、出る釘は打たれます。ですが、出過ぎた釘は打たれないのです。出過ぎた釘は打たれないという精神で、これからも頑張っていたいただきたいと思えます。

第11回研究会 プログラム

JA人づくり研究会は平成23年8月19日、東京・大手町のJAビルで、第11回人づくり研究会を開きました。11回目は「女性の力で地域に風を」と題し、これまで10回の開催の中で、実践報告をした4人の女性に再度登場いただき、パネリストとして女性の目線からJAが抱える課題、地域活性化に向けた提言、人材育成の必要性などについて議論しました。

【日時】平成23年8月19日(金)13時00分～17時00分

【会場】東京都千代田区大手町1-3-1 JAビル36階 大会議室

テーマ：「女性の力で地域に風を」

【代表レポート】

【パネルディスカッション】

コーディネーター：和泉真理 氏(JC総研 客員研究員)

パネリスト：佐野 房 氏(JA八戸 監事)

池田陽子 氏(JAあづみ)

高橋テツ 氏(JAいわて花巻 理事)

中村都子 氏(JAコスモス)

【参加者との意見交換】

【まとめ】

特集 第11回研究会

パネルディスカッション

テーマ「女性の力で地域に風を」

女性ならではの感性や企画力を生かして、地域に新しい風を吹き込んできた4人の女性たちが、それぞれの立場から意見を述べました。JA、地域における女性の活用をどうするか、地域の中でJAの目指すべき方向は、人づくりの課題は——。さまざまなテーマで議論を重ねる中で、JAが抱える課題や今後の可能性などが見えてきました。

コーディネーター：和泉真理 氏 (JC総研 客員研究員)

パネリスト：佐野 房 氏 (JA八戸 監事)

池田陽子 氏 (JAあづみ)

高橋テツ 氏 (JAいわて花巻 理事)

中村都子 氏 (JAコスモス)

和泉コーディネーター

今日のテーマは「女性の力で地域に風を」ということです。農村の半分が女性と言いながら、なかなか女性の活力が生かされていない。その中で、今村先生は出過ぎた釘と表現された、4名の方々に来ていただいております。

パイオニアの女性の皆さんたちに、JAの活動に女性の力を生かしてきた、そういう今までの活動のお話や、それから、その視点で見た今のJAはどうなのか、何をしていたらいいのか。そして、この研究会の最大のテーマであります、女性も含めたJAの人材、あるいは、地域、農業の人材をどうやって見つけて、どうやって育てていくかということについて、ヒントが得られればと考えております。

◆Q1 女性を生かした活動は、この数十年で進んでいるのでしょうか？

JAはこの数十年で、女性を生かした活動が、前より進んでいるのでしょうか。女性を生かした活動がなかなか進まないと言われている中で、皆さんがJAという舞台で生き生きと活動されているきっかけがありましたら紹介してください。(和泉コーディネーター)

JA八戸・佐野監事

日本一のニンニク産地と言われたJA田子町が不良債権を抱え、合併の話が進んでいく中で、役員になりました。それから平成19年2月から常勤ということで、約2年ちょっと。最終的には、最後の合併直前には、代表権の付いた専務という大役を務めさせていただいた。でも、理事会の中ではいろいろ攻撃されました。そのたびに、私は怒鳴られるたびに、嫌味を言われるたびに、体重も増え、そして、人も強くなって、もう怖いものはないという感じです。

6月末の第2回JA八戸総代会で、女性枠の理事のということを、総代会にかけたときに、否決をされました。私の出身のところの女性も、周りの空気に流されて、反対の立場に立ってしまったようです。その瞬間から、私の考えが変わりました。自分の門戸をふさいでいるのは、女性にも責任があると言えば、女性部たちに怒られそうですが、やはりそういうところもあるのではないのでしょうか。



佐野 房 氏 (JA八戸 監事)

青森県田子町出身。1972年、田子町農協の婦人部若妻部会会長に就任。82年、全国最年少で田子町農協婦人部長に就任。加工事業を手がけ、ニンニクの梅酢漬「にんにこちゃん」を商品化し、大ヒット。その後、青森県JA女性協会会長、JA全国女性協理事などを務め、2005年、女性部やその他活動など評価され、黄綬褒章を受章。JA田子町の理事、経済担当専務、専務を歴任。09年にJA八戸・監事に就任。人づくり、土づくり、産地づくりという、「3づくり運動」という考え方で、女性部の活動や、JAの事業運営にあたり、「田子にんにく」のブランドを守り、育て続けている。



今までは男性側のほうに、女性を入れる気持ちがないのだと、入れたくないのだとばかり、私は錯覚していました。女性が一步前に足を踏み出して、自分のポリシーを持って、きちんと意思表示をしたときには、何も、男性の人たちはシャッターを下ろすのではなくて、みんな、理事さん方は勉強をしていますし、役員さん方も勉強しているし、世の中の流れもそう変わってきているはずなのに、当の女性たちが、その場の雰囲気飲まれているということです。

JAいわて花巻・高橋理事

今年の5月の総代会に、女性理事ということで選出されました。女性理事が2名おります。女性の組合員も増えてきておりますし、総代も増えております。

ただ、形はそうなのですが、役員の席順というのを決めるときに、男性の理事が「女性たちも入れるか」と言ったのを聞きました。選出は女性枠から出てきましたが、出れば同じではないかと私は思っていたのですが、地域から出たのではなく女性枠から出たということに対しての、差別というのがあるのかなと感じました。

現在、JA職員の中でも、支店長も女性が今2人ですかね。それから課長とかそういうところには登用されてきています。そういう形的なものは、いくらかは良くなったかなと。あとは、実績を積まないと認めてもらえないと思います。特に女性は、男性よりも本当に苦勞して実績を積むということが大事だと、身をもって感じているところです。

JAコスモス・中村さん

今村先生がおっしゃっていた女性の組合員率が高いところイコールJAとしての活動が盛んかというところには、少し疑問もあります。うちのJAも実は女性の組合員比率が高くなってきましたが、実は男性の組合員が亡くなって、女性の組合員率が高くなっているのです。

私は、数の問題ではないというふうに思います。これはJAの弱点ではないかと思うのですが、いつも、組合員比率何%以上、総代員何%以上、女性理事何名以上、そこで満足をしているような気がするのですね。何をどうしたいのか。女性の総代になるなら何をしたいとか。何の役割を担いたいのか。そして、選ぶほうとしては何をしてもらいたいのか。目的というものがはっきりしなくて、数をクリアすることで、目標が達成されたかのように思っているところがあるのではないのでしょうか。



高橋テツ 氏 (JAいわて花巻 理事)

岩手県花巻市出身。生活改良普及員として岩手県職員を務めた後、1974年、JAの生活指導員に。その後、96年より産直事業を担当し、97年に「母ちゃんハウス だあすこ」をオープン、初代店長を務めた。2007年にJAを退職するが、認定農業者となり、ブドウ農家として、生産、加工にも取り組む。JA退職後は、日タイ経済連携協定プロジェクトに、JICA専門家として参加。タイの政府関係者や農協・農業者に生活改善指導、また、マーケティング担当として農協事業を指導。10年、JAいわて花巻の100%出資子会社「ハヤチネフーズ」に勤務。11年、JAいわて花巻・理事に就任。

特集 第11回研究会



◆Q2 次にJAはどんなことをすべきでしょうか？

ここ20年間のJAの事業を見ていますと、新しい事業として目に付くのは、大きく2つで、一つは加工も含めた直売所、もう一つは福祉事業。女性のアイデアと力によるものを、新しい事業としてJAが今進めているように感じています。次にJAはどんなことをしていったらいいんだということをお聞かせいただけますか。(和泉コーディネーター)

JAコスモス・中村さん

私は、JAには有形無形の資産というか、マンパワーを含めたよりどころがたくさんあるのに、生かしていないのが現状ではないかというふうにも思っています。

介護の考え方の中に、ICAという考え方があります。高齢者の皆さんの環境であったり、本人の性格であったり、身体状況であったり、強みというのを引き出して、それを介護計画の中に繁栄させて、よりその人らしい生活を実現していくという考え方です。

私は一度、何をやるかの前に、自分のJAの強みというのをみんなで考えてみるということも必要ではないかなと思います。見過ごされているいろいろな強みというのがあると思うのです。JA全体、JAグループとしての強みもありますし、それぞれのJAに、地域性であったり、いろいろな強みがあるので、そういうものを考えてみる必要があると思います。

その中で、JAの一番の強みというのは、食料の供給にかかわっているということではないかなと思っています。食料の供給をするんだという誇りを持ってもらえる農家を育てていくという、重要な使命をJAは忘れていないでしょうかということ、あえて問いかけてみたいというふうに思っています。

JAあづみ・池田さん

くらしの助け合いネットワーク「あんしん」「生き活き塾」の中で直売所をやった人たちが、御用聞き車あんしん号という車を、自分たちの力でお金を捻出して買いました。三方開きの車に、調味料、雑貨物、いろいろなものが載っています。常にここには必ずそういうものがあるという指定位置が決まってきました、それを購入して持ち帰る人たちもいます。

今までは地縁血縁で頑張ってきたのだけど、どうもなかなか難しくなってきた。やはり最後は、新しい縁づくりを、



池田陽子氏 (JAあづみ)

長野県出身。1968年に鯉淵学園卒業、JAあづみで生活指導員として勤務。JA長野中央会出身を経て、98年にJAあづみへ戻り、福祉課・課長代理に就任(2000年から課長)。98年7月に、くらしの助け合いネットワーク「あんしん」を設立。翌99年に「生き活き塾」をスタートさせ、この取り組みの中から、「五づくり畑」「菜の花プロジェクト」など、暮らしの向上につながる学びの場づくり、仕掛けづくりに尽力。06年にJAを退職した後、10年度「あんしん」の副委員長に就任。「あんしん」は、07年にJAグループでは初となる毎日介護賞を受賞。池田氏は10年に第19回若月賞を受賞。



JAが中心になってやっていかなければいけないと思っています。かつては農家組合長会というのがあって、常にひざを交えて話をする機会がありました。しかしこのごろは、JAの訪問日にチラシを回して終わり。やはり私は、組合員とのコミュニケーションによって、組合員は今一番何に悩んでいるのだろうかということ、把握していくべきだろうというふうに思います。やはりこの情報のないところには、JAがニーズに応えられることはないというふうに思っているのです。

JAいわて花巻・高橋理事

かつては共同購入とかそういうのを、一生懸命やっていたが、経済事業改革の名のもとに、かなり捨てられていったのではないのでしょうか。JAで捨ててきたものを量販店が取り入れて、ネットショップとか、テレホンショップとか、そういういろいろなショップの中で、料理講習会をしたり会員を募ったりということで、組織活動をしてきています。私たちが土台を築いてきたものを、全部量販店でやっているということに対して、私はちょっと悔しいなというところがあります。

直売事業と福祉事業が、女性の力でこのように立ち上がったということですが、私も平成7、8年のあたりからどちらにもかかわってまいりました。ですけれども、型としてはできましたが、直売事業もできたから終わりというということではなくて、それを土台にして、まだまだいっぱいやることのあるような気がいたします。

◆Q3 JAの人づくりは今後どうしたらいいのでしょうか？

皆さんは、JAにおいて女性のパイオニアという立場でいらっしゃると思いますが、今、皆さんの後に続いている女性の組合員、女性のJA職員といった方は育てているのでしょうか。あるいはどんなふうに育てていらっしゃるのでしょうか。また、育てるのには何が必要なのでしょう。さらには、JAの人づくりというのはこれからどうやっていったらいいのでしょうか。(和泉コーディネーター)

JAいわて花巻・高橋理事

「だあすこ」は女性部の自給運動から始まった事業です。自給運動をしていく中で、自分たちでは食べ切れないもの



中村都子 氏 (JAコスモス 福祉生活部)

高知県出身。1983年より生活指導員。組合員と接する中で、直売所をつくることを提案し、86年「はちきんの店」をオープン。87年、女性の農業技術習得を目指す「ここ掘れワンワン塾」、組合員学習の場「ちいばっばスクール」を開設。ヘルパー養成研修を開始し、98年、資格取得者のネットワークや活躍の場となる、助け合い組織の「にこにこ会」を発足。2007年、男性だけの助け合い組織「赤い禅隊」を発足し、「女男」共同参画に精力的に取り組む。また、次世代育成のために、あぐりキッズスクール、あぐりミドルスクール、あぐりライフスクールを企画。

特集 第11回研究会



があって余るから販売しようと。運転できないおばあちゃんたちが、おじいさんなり息子さんに運転してきてもらったものを出していましたが、運転してきた男性たちは、うちで残ったような野菜を出すということに対して、初めはあまり積極的ではなかったのです。それが、だんだん売れるようになったら、おばあちゃんが休むと言っても、おじいちゃんや息子さんたちが出すようになったというようなこともありました。やはりメリットがあるというか、喜びを感じるようなことがあれば人は育つのかなと思います。スタッフもそうですが、自分がやったことによって、喜ばれる実績が上がるというようなことを経験することによって、人も育っていったのかなと思っています。あとは自信ですよ。そういうものもあるのかなと思います。

JAあづみ・池田さん

「生き活き塾でみんな輝く！夢のある暮らしを目指して」というのが、「生き活き塾」のキャッチフレーズです。そして、環境、食、農業、そして健康というようなキーワードを重ねながら、じゃあ、私たちは地域でどうすればいいのだろうかということ、協同組合の原点に戻りながら、みんなで学習を重ねてきたわけです。そういう中から、「あんしん広場」「朗読ボランティア」「菜の花プロジェクト」「五づくり畑」、そして「学校給食に食材を提供する会」という、それぞれのグループのリーダーが育ちました。

「生き活き塾」というところは学びの場になったり、そしてその学びの場が活動する、参加する場になったり、そして安曇野の文化をつくり続けていく場になったのだらうと思います。私たちのこの協同組合というのは、組合員がいなくなったならばJAは存在しないものなのだと意識しなければいけないと思います。そこに働く職員、そして組合員の人たちにも、そういう緊張感を持ってもらうということは大事なことだと思っています。

JAコスモス・中村さん

JAは本当に、職員に対して、JAはこういう職員を求めているんだということを明確にしているだろうかという気がするんです。わがJAは、今後組織としてこういう方向に進んでいきたい、については職員一人一人にこういう役割を果たしてほしいということを、明確にしているだろうか。地域を引っ張っていく優秀なリーダーを職員に求めているだろうか。マネジメントを求めているだろうかというのを、少し現場で疑問に思ったりします。非常に言葉は悪いですが、

**和泉真理 氏 (JC総研 客員研究員)**

東京都出身。東北大学農学部卒業。1983年、農林水産省入省。農林水産大臣補佐官、女性・高齢者活動推進室長などを歴任。また、在職中に英国・オックスフォード大学に留学。ヨーロッパの中山間地域振興や、環境保全政策の著書多数書。2008年、JA総研（現JC総研）の客員研究員に。農村女性や女性グループの活動についても詳しい。



ひょっとしてコンプライアンスを守り、共済や貯金のノルマを果たす職員を求めているのでしょうかというところを感じることがあります。そこをもう一度、JA全体として、私たちの組織はどっちに歩いているのか、何を目標に歩いているのかというところを考えてみる必要性が、人づくりについてもあるのではないかなと感じています。

◆Q4 女性役員の仲が悪いというか、話し合ってくれない。どうしたらいいのでしょうか？

女性理事を選任するにあたり、JAの役員と女性部との話し合いの中で選ばせていただきました。うちの場合ですと、女性というのは本音で話してくれないという部分が非常に感じるのです。それなりにリーダーシップのある方、それなりの実績を残した方を選んだのですが、いざ選んだら、仲が悪いというか、本当に話し合ってくれないのです。(会場1)

JAあづみ・池田さん

新しい協同組合の本来の役割を担っていける組織をつくりたい、組合員教育活動の場として、組合員として、男でも女でも、いろいろな人たちが入って来られるような場づくりをしましょうということを提言しました。

やり始めて分かったのは、いろいろなことを言う人たちもたくさんいます。でも、それがそうではないんだよということを引きつと納得していかなければいけないと思います。だから、農協女性部の問題もあって当たり前。でも、それが協同活動なのかというところを、逆に私たち職員側から教えてやるべきだろうというふうには私は思います。だから、私は時としてはきつかったかもしれませんが、時としては憎まれたり恨まれたりしましたけれど、でもやはり、協同組合人として、それをきちっと伝えていきたいというふうにして伝えてきました。

◆JAコスモス・中村さん

仲が悪いというのは、同じ女性として悲しいなと思います。だから女は駄目なんだよと言われるんじゃないかなと思って、ちょっと悲しかったのですが。そういうときに男性の組織が役に立ちます。私たちのJAでは、「赤い禪隊」が仲を取り持っています。男性が混ざることですごくいい雰囲気になるんですよ。

◆Q5 成功体験を与えることが、人づくりの方策の1つなのかなという気がしました。

高橋さんのお話の中で非常に共鳴を受けたのが、人づくりの部分で成功体験というか、自分に返ってくる快感、それが成功体験となって、さらに上を目指そうというような気持ちになるんじゃないかということ。私は金融のほうを担当しており、日々目標、数字との追いかっこのです。成果を出した職員の行動を見ていますと、あのときに褒められた、表彰されたというのも、非常に力になっているような気がします。やはり成功体験をそれぞれ考えて与えていくということが、人づくりの方策の一つなのかなという気がしました。(会場2)

JAいわて花巻・高橋理事

実は私も、できるだけ生産者に近づきたいと、退職するにあたっては、ブドウ栽培も始めましたし、菓子製造業と総菜製造業と、それから弁当屋を始めました。お菓子で卵を1箱単位でとっていたのですが、それが余って、どうしようもなく厚焼き卵を出し始めたのですが、そうしたらお客さんが付いて、厚焼き卵の注文が来るんですよ。今回も、出るに先立って160個の卵から厚焼き卵を焼いてきました。販売額にすれば3、4千円なんですよ。金額からすればたっ

特集 第11回研究会



たそれぐらいなのですが、注文が来るということと、「おいしかった」と言われることが、非常に次につながる事なんです。うれしいですね。

直売事業について考えると、スタッフとすれば、「直売所があってもよかった」と言われることがたびたびあるのです。こういう農業情勢の中で、米だけではどうしてもやっていけなかったのだけれど、この直売事業を立ち上げてもらって本当によかったと言われることが、やってよかったかなと今思います。やはり充実感なり、そういうものというのは人の力になるのかなと思っています。

◆Q6 消費者を育てるために、取り組んでいることはありますか？

消費者を育てることも、これから大切だと思います。その消費者をどうやって育てるかということに、皆さん、何か取り組んでいらっしゃるのとかが、どんなふうにしたらというのがありましたらお願いします。(和泉コーディネーター)

JAいわて花巻・高橋理事

育てるということかどうかわからないのですが、正直であるということかなと思います。なぜこの葉物が虫食っているかというあたりは、農薬は使っていないよとか、そういうようなこととか、正直に伝えるべきだと思っています。

例えば、卵を直売所で出すときに、古くなった卵というのはゆで卵にするととても皮がむけやすいのです。そのときには、「ゆで卵用」と出すと大変売れまして、「ゆで卵用の卵ないんですか」と来るのです。ですが、それは、ちょっと新しい卵を置けばゆで卵用になりますよと伝えてあげたりします。そういう人から人に伝えるということはスーパーではできないことかなと思いますので、そういうかたちで消費者と顔つなぎをするというか、そういうことは大事にしていきたいなと思っています。

JAコスモス・中村さん

私が直売所「はちきんの店」を始めたのが25年前です。そのときの安全の基準、今みたいに難しく言われていないときですので、消費者が一番分かりやすい安全の基準って何だろうと考えたときに、農家が同じものを食べているということをアピールするようにしました。今は生産履歴だとか、いろいろな安全性がきちんと証拠で残る方法がありますけれど、私は今でもやはりそこは一つの安全基準じゃないかなと思っています。

ただJAとして、安全性をPRするという部分が、少しまだ十分な機能を果たせていないと思うので、生活活動の中では、今後はそれが大きな課題になるというふうに認識しています。

◆Q7 全国のJAの役員や組合長に伝えたいこと。

全国からJAの組合長や役員の方々が集まっています。一言で結構ですので、役員や組合長に言いたいことを、よろしく願いいたします。(和泉コーディネーター)

JAコスモス・中村さん

役員、組合長の皆さんにお願いしたいのは、それぞれJA、特色があります。自分のJAの、先ほども言いましたが、強みをしっかり確認して、たぶんやられていることだとは思いますが、私たちの組織は何をするべきか、進むべき方

向性というものをしっかり、私たち職員にも、地域の組合員、住民の皆さんにも示していただくことではないかなと思っています。

私が求めるところは、やはりJAはどこに行くのか、各部門の役割は何なのかということをしっかり、アバウトな言い方でなく具体的に説明していただける組合長ならうれしいなと思います。

JAあづみ・池田さん

私はいつも言っているのですが、富士山に例えて、やはり富士山の頂上の雪の白いところ、ここに事業があるんだと。それで、あのありったけ広い裾野のところ、私たちの活動と運動があるんだと。そこには組合員の人のニーズを聞いたり、組合員の人たちの思いを醸成していく、その活動の部分があるんだと思うのです。

組合員、職員、役員というのが、一つのもとに働くという、協同運動者であるべきだろうと思うのです。そうすると、私たちの願いや思いを組合員が地域でいきいき活動しているのかな、にこにこしているのかなという、その思いを常につながられる役員になってほしいなど。そして、その旗を思い切り、見える形で振り続けてほしい。どこにいるかではなくて、俺はいつもここで旗を振っているんだよという役員であり続けてほしいなというふうに、このごろ思います。

JAいわて花巻・高橋理事

10年、20年前の常勤役員の方に比べまして、今の常勤の方々はずごく忙しい。そういうふう思うのです。あまり忙し過ぎるので、相談とか、遠慮してしまう部分もありますので、できましたら常勤役員の方々は、日々の事業の進行とともに、ちょっと空きのスペースをつくっておいていただければと思います。いつでも相談できるような、空きのスペースをつくっていただければ、もっと違う部分ももしかして見ていただけるのかなというふうに思います。

JA八戸・佐野監事

現在のJA八戸の常勤役員たちは、それぞれ合併前のJAの組合長たちがやっていますから、意思疎通というのが私から見るとちょっと欠けているような気がします。私も役員の方の端くれですので、任期中全力を挙げて男性のしりをはたくという役目に徹したいと思っています。

まとめ 今村代表

JAは地域の生命線だと思っています。これに類する路線を失ったら、もうJAをやめたほうがいいんじゃないかと、本当に思っています。これを忘れたら、企業と何も変わらない。そういう中で、地域の生命線ということを実現するためには、やはり基本は人材なのです。

中でも、今日の4人の方々のお話を聞いていて、企画力がすぐれているということを実感しました。そして情報力。これは受信力が非常に大事だと思います。発信力も大事ですが、情報力は受信力が大事。だから、こういう研究会をやったり、本を読んだり、いろいろネットにアクセスしたり、この情報力をどう高めるかということが大事です。あと技術力、管理力、組織力。これはちょっと時間が少ないので省略します。

この5つの要素の総合力が人材だと思うのです。今日おいでのパネリストの皆さんは、私、その点では、みんなこの5つの要素の総合力に長けていると思っております。4人の皆さん方の発言には本当に感激いたしました。コーディネーターの和泉さんもいいシナリオを作っていただき、大変良かった。ありがとうございました。



JA人づくり研究会 ホームページのご案内

<http://www.ja-hitodukuriken.jp/>

JA人づくり研究会

検索

JA人づくり研究会ホームページでは、これまでに開催した研究会の内容を要約した「JA人づくり研究会通信」PDF版の掲載や、研究会で配布した資料などの紹介、次回開催の研究会の最新情報などを公開しています。

8月から新たに「掲示板」を開設しました。現在、東日本大震災による東京電力福島第1原子力発電所事故の風評被害対策などについて、熱心な投稿をいただいています。

研究会では、会員の皆さまに自由に情報交換いただき、さまざまな課題の解決に向けたヒントなどを得ることができる場として掲示板を発展させてきたいと思っています。皆さまのご意見をお待ちしております。

事務局
だより

〈JAの最前線に触れ、自らも勉強〉

JA全中 教育部教育企画課 大川内絵美

だいぶ冬の寒い気候になり、朝晩はだいぶ冷え込むようになりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。事務局を担当しております全中教育部の大川内です。

さて、先日人事課の採用担当よりヒアリングがありました。そろそろ本格的に始まる採用活動の参考にするそうで、若手を対象に①自分の業務内容、②志望動機、③その他（入る前と入ってからギャップなど）について語ってほしいとのことでした。雑談も交えて30分程話してきましたが…、話しているうちに新入気分が抜けていないことを痛感し、冷や汗をかいてしまいました。来年は入会3年目、2011年も暮れに差し掛かっていますが、しっかりしなければと気持ちを新たにしたい1日でした。

農業や食、協同組合への興味と、今までの経験が繋がってJAへ辿り着いたのですが、こうして自分の履歴書を眺めてみると、小中高そして大学・アルバイトも含め、「農」に深く触れる機会が無かったことを改めて実感します。マンション育ちで家庭菜園程度のことをしたことはありますが、それさえもすぐに枯らせてしまい母に手伝ってもらって始末でした。唯一挙げられることは父の実家が田畑に囲まれたのどかな町にあることでしょうか。

人づくり研究会は、講演をお願いする方も参加される方も現場の最前線で活躍されている方がいらっしゃる貴重な場です。事務局としてお手伝いするだけでなく、しっかり勉強していきたいと思っています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

JA人づくり研究会通信

発行者：今村奈良臣

発行：全国農業協同組合中央会(JA全中) 教育部

編集：日本農業新聞 広報局 事業開発部

〒110-8722 東京都台東区秋葉原2-3

電話 03(5295)7410 ファクシミリ 03(5295)3370